

鳴上遺跡群 34

上
郡

2010

高槻市教育委員会

鳴上遺跡群 34

はしがき

高槻市教育委員会では、平成21年度、市内各遺跡で立会調査を実施して、地下遺構の保存が図られることを確認してきました。その一方、弥生時代有数の環濠集落である安溝遺跡の保存を図るために、調査指導検討委員会の指導のもと、平成20年度に引き続き京都大学農場部分について範囲確認調査を実施しました。昨年度の調査では、昭和43年に検出された環濠につながる遺構を検出しました。平成21年度は、遺構の広がりを確認するために、遺跡の中心部とみられる農場事務所の南側、農場東部の果樹園、西部の水田について調査区を設定し、調査を実施しました。その結果農場事務所の南側では環濠の一部とみられる遺構を検出し、農場東部では方形周溝墓を確認することができました。

また、昨年度に北東側で検出した内側環濠の下層調査では、鍬や手斧などの木製品をはじめ、多数の土器・石器、種子、獸骨等の自然遺物が出土しました。環濠の確認や豊富な出土遺物は、弥生時代前期の安溝遺跡の様子を具体的に復元する貴重な手がかりとなるもので、今後遺跡の保存と公開を進めるうえで重要な成果を得ることができました。

最後に、本書をまとめるにあたり、ご教示やご協力いただいた関係機関をはじめ、多くの方々に心から感謝申し上げます。

平成22年3月31日

高槻市教育委員会 文化財課

課長 鐘ヶ江 一朗

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が平成21年度国庫補助事業として計画、実施した高槻市所在の史跡・島上郡衙跡附寺跡周辺部及び市内遺跡の発掘調査事業（総額18,000,000円）の概要報告書である。
2. 事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成21年4月1日に着手し、平成22年3月31日に終了した。
3. 調査は、高槻市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センターがおこなった。本書の執筆・図面作成・製図は、宮崎康雄、橋本久和、高橋公一、早川圭、内田真雄、今西康宏、西村恵祥、佐伯めぐみ、廣瀬智子、濱野俊一がおこない、分担は文末に記した。遺構の写真撮影は橋本・早川が担当した。整理作業については以下の各氏が参加した。厚く感謝する。

西岡和江、梅靖代、池田理美、原綾子、前田幸美、瓦林三千代、立岩美津子
4. 調査の実施にあたり、土地所有者及び関係機関各位のご協力をいただいた。厚く感謝いたします。

目 次

I 嶋上郡跡	1
II 中城遺跡	2
III 天神山遺跡	3
IV 安満遺跡範囲確認調査	4
V 出土遺物保存処理	30

No.	遺跡名(地区)	調査地	面積(m ²)	届出者
1	嶋上郡跡(73-C)	郡家新町170-5	77.27	個人
2	中城遺跡(2009-1)	昭和台町2丁目19-16	307.70	個人
3	天神山遺跡(2009-1)	天神町2丁目14-10	168.52	個人
4	安満遺跡(範囲確認調査)	八丁畠町260・266	90.00	高槻市教育委員会

平成21年度 市内遺跡調査一覧

I. 島上郡衙跡

1. 島上郡衙跡（73-C地区）の調査

調査地は郡家新町170-5の一部にあたり、小字名は「藤ヶ本」である。現状は宅地である。当該地は古代山陽道を踏襲する西国街道の南側にあたり、北東には史跡島上郡衙跡が位置している。

調査は個人住宅建設工事に先立って実施したもので、土層の観察と遺構の確認を行なった。層序は整地土（0.1m）、暗灰色砂質土（0.05m）、暗褐色砂質土と灰白色砂質土による盛土（0.25m）、以下、暗灰褐色砂質土（旧耕土）であり、遺構・遺物は検出されなかった。



図1 島上郡衙跡 調査位置図

(早川)

II. 中城遺跡

1. 中城遺跡（2009-1）の調査

調査地は高槻市昭和台町2丁目19-16あたり、小字名は「安房」である。現状は宅地である。遺跡は富田台地の先端部に位置する中世の集落跡と考えられているが、弥生時代後期から古墳時代にかけての土器片も確認されている。

調査は個人住宅建設工事に先立って実施したもので、土層の観察と遺構の確認を行った。

現況地盤から0.15m下の盛土層直下で、黄橙色砂質シルトの地山を検出し、地山面で精査を行なったが、遺構・遺物は検出されなかった。



図2 中城遺跡 調査位置図

(内田)

III. 天神山遺跡

1. 天神山遺跡（2009-1）の調査

調査地は高槻市天神町二丁目10-24にあたり、小字名は「天神山」である。現状は宅地である。遺跡は安岡寺・日吉台丘陵の南端付近に位置する弥生時代の集落跡として知られているが、1950年代から大規模な宅地造成工事が実施されている。

調査は個人住宅建設工事に先立って実施したもので、土層の観察と遺構の確認を行った。

現況地盤から0.2m下の盛土層直下で、黄灰色粘土の地山を検出し、地山面で精査を行なったが、遺構・遺物は検出されなかった。



図3 天神山遺跡 調査位置図

(今西)

IV. 安満遺跡範囲確認調査

1. 安満遺跡の位置と調査

高槻市中心部から少し京都よりの八丁暖町・高垣町の周辺は近年まで近郊農村地帯であったが、昭和40年代以降、住宅地の造成が活発となり住宅が密集するようになった。この地域には京都大学大学院農学研究科附属攝津農場を中心とした弥生時代前期の環濠集落である安満遺跡が存在する（図4）。農場が開設された昭和3年（1928）5月に発見され、島田貞彦らによる発掘調査は大阪北部で行われた最初の弥生時代遺跡の発掘調査であった。昭和7年（1932）、小林行雄は出土した土器の研究から安満B類土器としたものが北九州の遠賀川式土器に類似することを指摘し、北九州に伝わった弥生文化が時を経ずに近畿地方にまで到達したことを論じた。これにより、弥生時代の研究が本格的に展開することになった。

遺跡は海拔7~11mの微高地にあり、JR東海道線を越えて旧西国街道付近を北の限界とし、南は阪急京都線付近、西はJR跨線橋付近、東は桧尾川右岸まで広がる。桧尾川が形成した扇状地から淀川低地につながる豊かな冲積平野が広がり、近年まで、水田地帯として緑が保たれていた。昭和41年（1966）以降、農場周辺でも宅地開発などがはじまり、とくに農場北側で大規模な宅地造成工事が計画された昭和43年（1968）の発掘調査では、東西約120mの規模で集落をめぐると推定される弥生時代前期の環濠2条が検出された。外側の環濠からは、多量の土器とともに、未製品を含む多数の木製品が出土し、とりわけ多彩な農耕具や漆塗りの櫛・かんざしなどの装身具も含まれ、安満遺跡の重要性が認識された。そうしたなか環濠など重要遺構の保存を要望する市民の声や高槻市議会の決議などもあり、昭和44年（1969）3月に史跡仮指定が行われ保存が図られた。

その後、開発などにより周辺部の発掘調査が継続し、弥生時代前期から後期までの変遷をたどることができるようになった。これまでの成果を総合すると、前期の居住域は環濠で囲まれた農場事務所付近とみられる。居住域の南側一帯に水田が広がっていたよ



図4 安満遺跡位置図

うで、農場正門東側では前期の用水路と丸太杭や板材で造られた井堰が検出されている。また、農場東側では100基を超える方形周溝墓等の墓域が確認され、弥生時代中期の木棺墓も検出されている。

このように安満遺跡は居住域・生産域・墓域の三要素で構成されたことがわかる弥生時代前期の稀有な遺跡であることが認識されてきた。平成5年（1993）11月には、関係者の努力により農場北側一帯の東西600m・南北100mの約64,000m²が平成5年（1993）11月に史跡に指定された。

農場部分には環濠の延長部分など重要な遺構があると推測されるものの、史跡指定はなされていない。そこで農場内の遺構の保存を図るために、安満遺跡調査指導検討会の指導のもと、平成20年度から2か年の予定で範囲確認調査に着手した（20年度調査成果については『島上遺跡群33』を参照）。

今年度は、まず昨年度に設定したトレンチ1西端部の溝1（内側環濠）の下層調査に着手するとともに、農場東半部の地中レーダー探査・ポーリング調査を実施した。次いで、居住区南側を画する環濠の所在を確認するため、農場事務所南側に南北方向のトレンチ3-1・3-2を設定した。さらに、地中レーダー探査等によって地下約2mまでのおまかた土質分布（疊土、粘質土、泥土）が推定されたことを受けて、農場西部の水田（西地区）、農場東部の果樹園（東地区）についても調査を実施した（図5・6）。

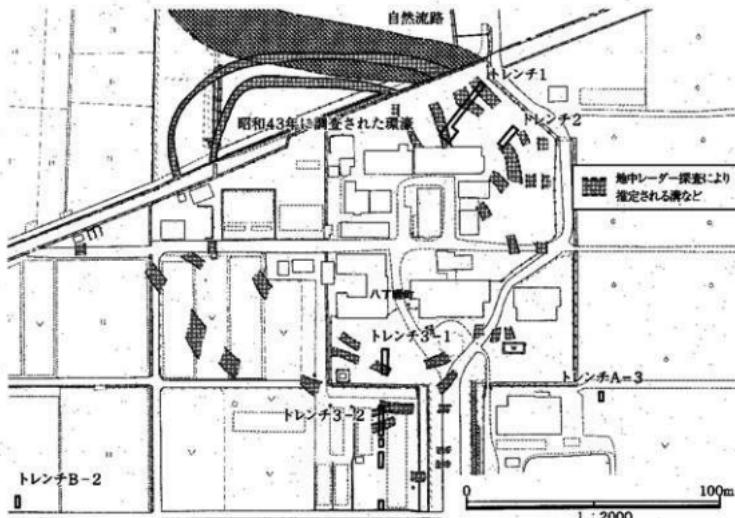


図5 安満遺跡調査位置図



図6 調査位置図（トレンチ配置図）

2. 中央地区の調査

トレンチ1の下層調査(図7・8・図版2~4)

平成20年度の調査では、昭和43年に調査された内側環濠につづくとみられる溝1をトレンチ1西端部で検出した(図7)。上層には樹枝や板材などが分厚く堆積し、結歎式の朱漆塗り櫛が出土した。そのため、下層調査は21年度に実施することとし、その余の部分の精査を行って平成20年度調査を終了した。今年度に入り、溝1下層調査に着手したところ、鐵などの木製品、木の実・獸骨などの自然遺物が多数出土した。

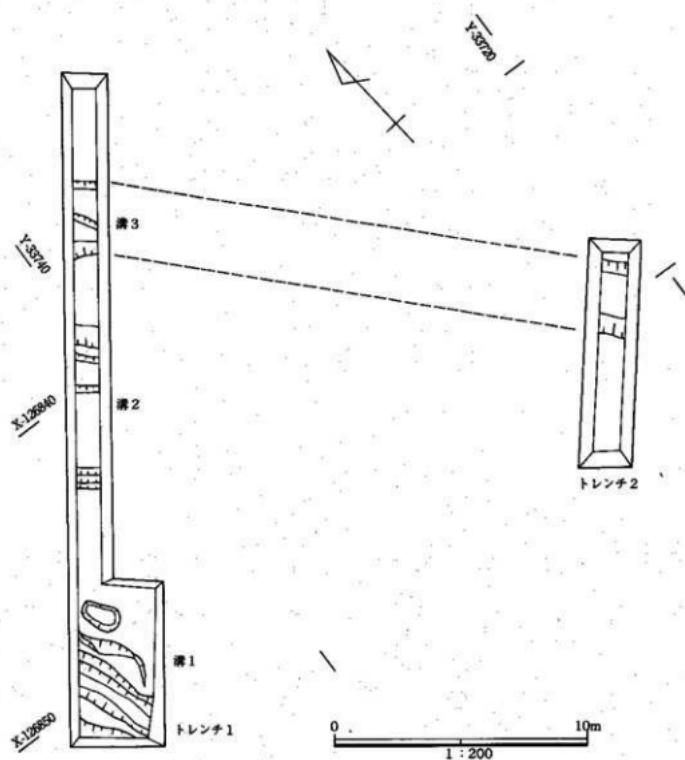


図7 安満遺跡トレンチ配置図

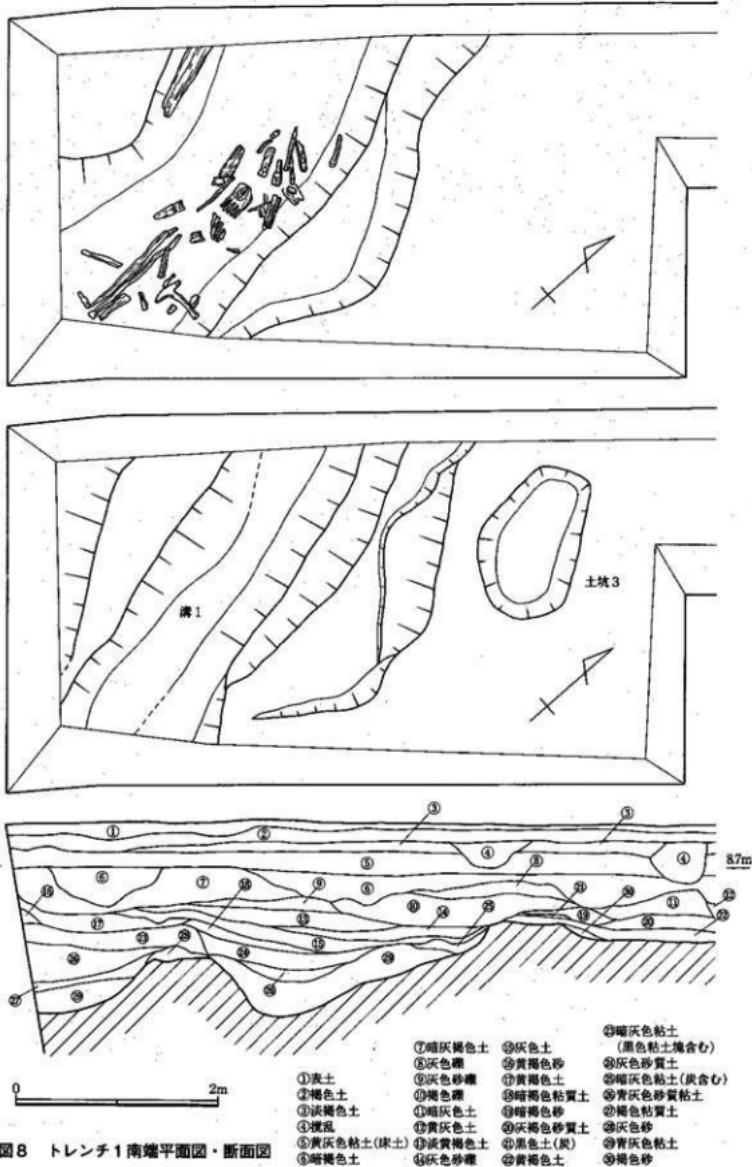


図8 トレンチ1南端平面図・断面図

トレンチ1西端部の層序と遺構の状況を整理すると、地表下0.5~0.6mに分厚く堆積する灰色疊・褐色疊の上下で遺構が検出された。上層遺構は疊層上面で検出された約30個の柱穴などがある。上部に堆積する暗褐色土や柱穴内から、主に摂津第IV様式を中心とする弥生時代中期の土器や石器が出土している。下層遺構は砂疊層下の灰色土を除去して検出された溝1と土坑3である。地山は無遺物の暗灰色粘土である(図8)。

溝1の層序を検討すると、樹枝や板材・漆塗りの櫛が検出された有機質を多量に含む暗褐色粘質土層(厚さ約0.1m)が内側に向けてレンズ状に堆積している。同層は炭や焼土を含み、溝1の上面全体を覆う。これを除去することにより溝幅を把握することができた。東側肩部は地山の暗灰色粘土を掘り込み、底部中央に向けて緩やかにつづく。西側は細かい黒色粘土塊を含む暗灰色粘土を肩部とし、底部中央に向けて急斜面となる。両側の肩部はほぼ同じ高さで、溝幅約2mを測る。暗褐色粘質土の下は灰色砂質土(0.2m)、青灰色粘土(0.15m)がレンズ状に堆積し、最下層は青灰色砂質粘土(0.35m)である。溝1の深さは0.8mを測る。

暗褐色粘質土層下位の樹枝や枝葉をていねいに取り除きながら調査を進めたところ、溝中央部~南寄りの長さ2m・幅1mの範囲から、未成品を含む又鋤や手斧など木製品6点が出土した(図8上)。また、下層の灰色砂質土層から、昨年度は東側肩部の北壁辺で2点の壺が出土したが、今回は前期の甕片などが少量出土した。

さて、溝1の西側肩部を形成する暗灰色粘土と下層の青灰色粘土(0.35m)を断ち割ったところ、有機質を含む褐色粘質土(0.1m)・青灰色粘土(0.2m)が西側に傾斜して堆積していた。そこで溝1西肩の暗灰色粘土・青灰色粘土を除去して精査した結果、下層の褐色粘質土から獸骨の破片等が出土し、溝1に先行する溝あるいは落ち込み状の遺構と判断された。このことから、溝1西側の肩部は当該遺構が埋没後に暗灰色粘土・青灰色粘土により形成されたもので、暗灰色粘土に細かい黒色粘土塊が含まれるのは、溝1掘削時の堆土を積み上げたためとも考えられる。なお地山面でみると、溝1の幅は1.5mを測り、直線的に掘削されている。溝1以外の遺構として土坑3がある。長さ1.5m・幅1m・深さ0.3mを測り、上面は炭や焼土に覆われ溝1と同時期であることが判る。

トレンチ3-1(図9・図版5)

居住域をめぐる環濠の南辺を把握するため、農場事務所南側にトレンチ3-1(幅2m×10m)、トレンチ3-2(幅1m×40m)を設定した。後者については北から南へA区~D区に分けた。トレンチ3-1では、弥生時代前~中期の柱穴・土坑等を、トレンチ3-2では前期の環濠とみられる溝3条や柱穴・土坑、自然流路を検出した。

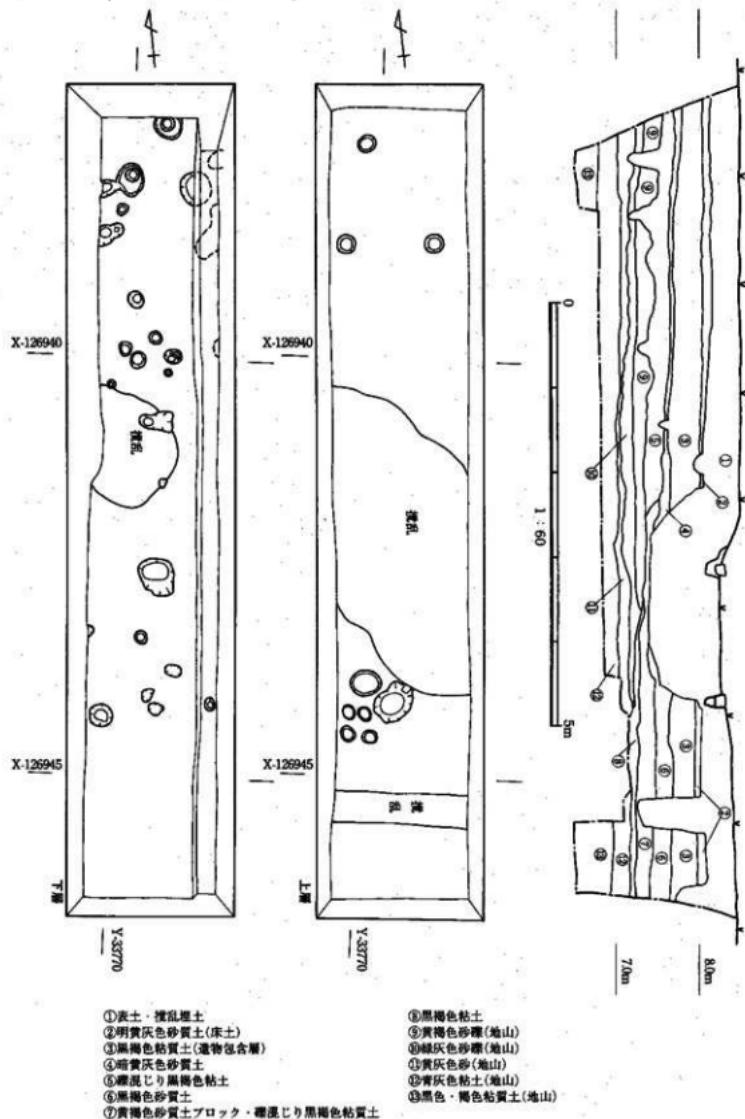


図9 トレンチ3-1平面図・断面図(東壁)

トレンチ3-1の基本的な層序は、表土・搅乱土(0.3m)、明黄灰色砂質土(床土0.1m)、黒褐色粘質土(遺物包含層0.3~0.4m)、炭片・焼土を含む暗黄灰色砂質土(0.1m)、疊混じり黒褐色粘質土(0.2~0.3m)、地山である。トレンチ中央の搅乱より南側では、遺物包含層下は黒褐色砂質土(0.2~0.3m)、黄褐色砂質土ブロック・疊混じり黒褐色粘質土(0.2m)、黒褐色粘土(0.1m)、黄褐色砂疊(地山)となる。地山は全体として南西側へ緩やかに下降しており、黄褐色砂疊以下は緑灰色砂疊、黄灰色砂、青灰色粘土、黒色・褐色粘質土の順に堆積している。

遺構は上層と下層に大別される。上層遺構は包含層直下で検出した。調査区北半で暗黄灰色砂質土上面から直径約0.2mの柱穴数個、調査区南半で黒褐色砂質土層中から径約0.15mの柱穴数個や径0.3~0.4mの土坑を検出した。下層遺構は、地山面で径約0.15~0.3mの柱穴や土坑を確認した。柱穴の中には柱が遺存していたものもある。これらの遺構からは弥生時代前期から中期にかけての土器片などが出土した。なおレーダー探査により溝状遺構と推定していたものは、農場建物に伴う搅乱坑であった。

トレンチ3-2(図10・図版6・7)

基本的層序は、表土(0.2m)、黒褐色粘質土(遺物包含層0.1~0.4m)、灰白色砂疊(0.2~0.5m)、黄褐色粘質土(0.1m)、褐色粘質土(0.2m)、黄褐色砂疊(地山)である。

A区では北側に溝4、南側に溝5を検出した。いずれも東西方向で断面は逆台形を呈し、黄褐色粘質土上面から地山層まで掘り抜いている。溝4は幅1.9m、深さ0.6m、底面幅1.2m、同標高6.9mを測る。溝内堆積土は、灰色砂・褐色砂が互層をなす上層(0.4m)と、樹枝・粗砂混じりの青黒色砂質土(0.2m)の下層に大別される。溝5は、砂疊層が肩部を侵食しているものの、幅3.2m、深さ1.5mに復元され、底部幅1.7m、同標高6.1mを測る。溝内堆積土は、褐色ないし茶褐色の砂疊層(0.9m)と、樹枝混じりの青黒色粘質土(0.6m)に大別される。遺物としては、溝4・溝5の下層から前期の土器片が出土している。このほか、黄褐色粘質土層及び褐色粘質土層から、直径0.1~0.25mの柱穴をそれぞれ数個検出した。

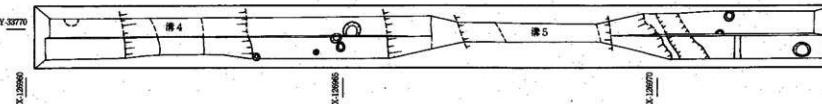
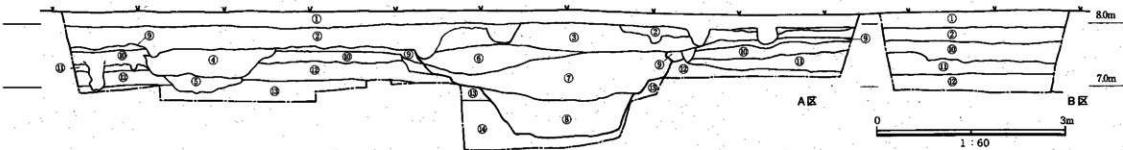
B区では遺構を検出しなかった。

C区中央では幅1.6m、深さ0.5mの自然流路を検出した。灰白色砂(0.4m)・灰褐色砂(0.1m)が堆積し、底近くから前期の土器片が出土した。流路埋没後に長辺2.1mの土坑が掘り込まれている。

また、C区を南へ拡張したところ、遺物包含層直下で幅2.9m、深さ0.8m、底面幅1.5m、同標高6.7mの溝6を検出した。溝5からは約17m隔たっている。溝内は灰白色砂(0.1m)、褐色砂疊(0.4m)、茶褐色砂疊(0.3m)が堆積し、褐色砂疊層中から前期の土器片が出

土した。溝4・溝5と同様の方向性を示し、前期の環濠とみられる。

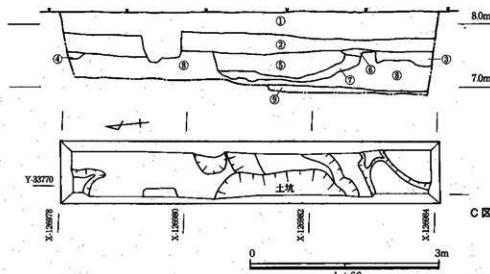
南端のD区では、基本的層序は同じだが、遺物包含層下は砂質土が主体となる。灰白色砂疊下の黄褐色砂質土上面で直径0.15~0.2mの柱穴を数個検出し、その下の暗黄褐色砂層上面でも柱穴1個を検出した。下層の柱穴やその上に堆積する灰褐色砂層からは弥生時代前期の土器が出土している。また灰白色砂疊層の上から地山まで掘り込まれた溝7を検出した。幅2.4m、深さ0.7m、底部標高は7.1mを測る。下層に堆積する疊混じり黒褐色砂質土から弥生時代中期の土器が出土し、中期の環濠の可能性がある。



X-32975

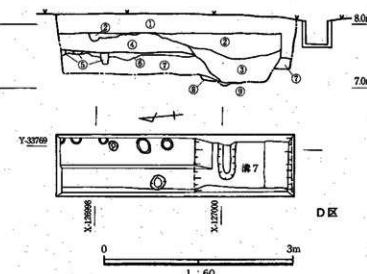
トレンチ3-2 A・B区平面図及び断面図(東整)

- | | | | | | |
|---------|---------|---------|-----------|-------|------|
| ①表土 | ⑥褐色砂壤 | (溝2埋土) | ⑪黄褐色砂質土 | (地山) | |
| ②黒褐色粘質土 | (遺物包含層) | ⑦茶褐色砂壤 | (溝2埋土) | ⑫灰褐色砂 | (地山) |
| ③灰白色砂壤 | ⑧青褐色粘質土 | (溝2埋土) | ⑨灰色粘土 | (地山) | |
| ④灰色～褐色砂 | (溝1埋土) | ⑩青褐色粘質土 | ⑩黑色・褐色粘質土 | (地山) | |
| ⑤青黑色砂質土 | (溝1埋土) | ⑪褐色粘土 | | | |



トレンチ3-2 C区平面図及び断面図(西整)

- | | | |
|----------------------|---------|---------|
| ①表土・擾乱堆土 | ⑥灰白色砂 | |
| ②黒褐色粘質土 | (遺物包含層) | ⑦灰褐色砂 |
| ③暗褐色砂質土 | ⑧黄褐色砂 | |
| ④黄褐色砂質土ブロック混じり暗褐色砂質土 | (地山) | ⑨青灰色粘質土 |
| ⑤黄灰色砂混じり灰褐色砂質土 | (土坑埋土) | ⑩青灰色砂質土 |



トレンチ3-2 D区平面図及び断面図(東整)

- | | | |
|-------------|---------|-------|
| ①表土 | ⑥黄褐色砂質土 | |
| ②黒褐色粘質土 | (遺物包含層) | ⑦灰褐色砂 |
| ③擾乱じり黒褐色砂質土 | (溝埋土) | ⑧黄褐色砂 |
| ④灰白色砂 | ⑨青灰色砂質土 | |
| ⑤暗褐色砂質土 | | |

図10 3-2トレンチ平面図・断面図

3. 西地区的調査

トレンチ4（図11・図版7）

農場西南隅の職員寮敷地内に東西2m、南北5mのトレンチ4を設定し、地表下2.2mまで掘り下げて遺構・遺物の有無と土層の確認を行なった（図11）。

層序は、宿舎建設に伴う表土・盛土（0.75m）、農場旧耕土（0.25m）、以下は層厚0.05～0.2mの灰白色ないし灰褐色の粘質土層が10層づき、地表下2.1mで黒色粘質土層に至る。いずれの層でも遺構・遺物は確認できなかった。黒色粘質土層については自然堆積による植物遺体層とみられ、農場内で広く確認している。

なお、トレンチ4の南側では職員宿舎建設に先立つ1972年、京都大学による発掘調査が行われた。当時の調査では、8世紀の畦畔や弥生・古墳時代以降の遺物を包含する水田層が検出されている。地山とされた紫黒色粘質土層は、今回の調査で検出した黒色粘質土層に相当するとみられ、両者の土層の相対的な関係からは、水田化が進むのは弥生時代中期以降のようである。また、一帯は弥生時代前期には低湿地が広がり、水田適地でないことが花粉分析の結果からうかがえる。

トレンチB-1

西地区南東隅の圃場内東端で、水田遺構の検出を目的として南北方向に設定した。規模は幅1m、長さ5mである。層序は、耕土（0.2m）、整地土（0.15m）、茶褐色粘質土（0.2m）、黄褐色砂礫（地山0.25m）で、以下は黄灰色砂、青灰色粘土、黒色～褐色粘質土の順に堆積している。南端で東西方向の溝9を検出した。

溝9は幅2.2m、深さ0.6mを測り、断面形状はほぼ逆台形である。溝内堆積土は黒色粘土（0.3m）の上層と、砂混じり青灰色粘質土（0.3m）の下層に分けられる。下層は地山掘削土を踏み込んだような状況を呈し、弥生時代前期の土器片が出土した。底面の標高は6.1mであるが、下層上面では6.4mを測る。

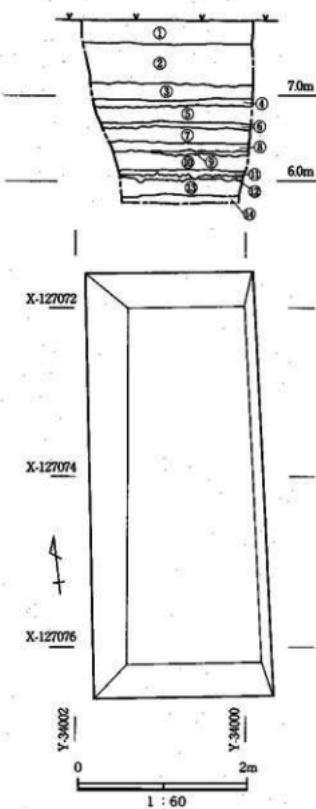
トレンチB-2

西地区中央部で、水田遺構の検出を目的として東西方向に設定した。規模は幅1m、長さ5mである。層序は、耕土（0.2m）、黄灰色粘質土（0.2m）、灰黄色砂礫（0.25m）、灰白色砂（0.05m）、黄褐色粘質土（0.3m）、暗褐色粘質土（0.2m）、灰色粘質土（0.3m）、青灰色粘土（地山0.1m）である。黄灰色粘質土層から土師器皿の細片が出土したのみで、遺構は何ら認められなかった。

トレンチB-3

西地区北西部で、水田遺構の検出を目的として東西方向に設定した。規模は幅1m、長さ5mである。層序は、表土（0.2m）、灰色砂礫（整地土0.15m）、淡黄褐色砂質土（0.2m）、

灰褐色砂質土 (0.15m)、褐灰色粘質土 (0.2m)、褐色粘質土 (0.15m)、灰白色砂 (0.15m)、灰白色粘土 (0.15m)、灰色粘質土 (0.1m)、黒色粘土 (地山0.05m) である。遺構・遺物ともに何ら認められなかった。



- | | | | |
|---------|----------|----------|----------|
| ①表 土 | ⑤明灰白色粘質土 | ⑨灰褐色粘質土 | ⑬明灰白色粘質土 |
| ②盛 土 | ⑥灰白色粘質土 | ⑩暗灰色砂質土 | ⑭黒色粘質土 |
| ③旧耕土 | ⑦灰白色粘質土 | ⑪灰色粘質土 | |
| ④暗灰白色粘土 | ⑧黄褐色粘質土 | ⑫暗灰白色粘質土 | |

図11 トレンチ4 平面図及び断面図（北壁）

4. 東地区の調査

トレンチ5

農場の東側隣接地では弥生時代中期前半～中頃の方形周溝墓群が広がり、農場東南隅では中期の木棺墓等を検出している。

このため地中レーダーによる詳細探査を実施し、溝状遺構が推定される東辺中央部に、東西10m、南北2mのトレンチ5を設定した。

基本的な層序は、表土・旧耕土（0.4m）、茶褐色粘質土（0.2～0.3m）、灰白色砂礫（地山0.4～0.5m）である。以下は黄褐色砂礫、青灰色粘質土の順に堆積している。遺構としては、灰白色砂礫層上面で検出した方形周溝墓1・2がある。1はトレンチ西側で南東側の一部を確認したもので、台状部の長さは東西2.0m、南北0.6mを測る。盛土は削平のために確認できなかった。周溝は東と南側で部分的に検出した。幅1.6m、深さ0.4～0.5mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は礫混じりの黄褐色粘質土で、南側の周溝では、弥生時代中期前葉の甕が台状部側斜面に接して出土した。1の東側は上層から樹根などの攪乱が著しいが、灰白色砂礫層上面に掘りこまれた土坑から中期前葉の甕が出土していることから、1に連接する方形周溝墓の可能性が高く、2としておく。

トレンチA-1

東地区中央部で水田遺構の検出を目的として設定したトレンチで、規模は東西2m、南北1mである。層序は表土（0.15m）、黄灰色砂質土（床土0.1m）、褐色砂質土（0.3m）、灰色砂礫（0.4m）、灰白色砂（0.2m）、黒色粘土（0.1m）、青灰色砂礫（地山）である。遺構は確認できず、遺物は黒色粘土の下、青灰色砂礫層上面で土器片が出土したが、磨耗が著しく細片のため時期は不明である。レーダー探査やボーリング調査によれば東地区中央には南北に走る流路が推定されており、本トレンチは砂礫層が厚いことから、その中心付近に位置しているものと考えられる。

トレンチA-2

果樹園の南東部で水田遺構の検出を目的として設定したトレンチで、規模は東西1.5m、南北3.0mである。層序は表土（0.3m）、褐色粘質土（0.15m）、黄灰色粘質土（床土0.05m）、茶褐色粘質土（0.2m）、褐灰色砂質土（0.2m）、灰色砂（0.3m）、黒色粘土（0.1m）、灰色粘質土（0.1m）、灰色砂（0.1m）である。遺構は確認できず、遺物は茶褐色粘質土から土器の細片が出土したが、時期は不明である。

トレンチA-3

居住区の展開する扇状地端部が、低湿地へと移行していく地形が想定される地点に設定したトレンチで、規模は東西2.5m、南北4.4mである。層序は、耕土（0.2m）、礫混

じり茶褐色粘質土（遺物包含層 0.2m）、灰白色砂礫層（0.1m）、茶褐色粘質土（0.1m）、暗褐色砂質土（0.1m）、灰白色粘土（地山）である。疊混じり茶褐色粘質土は弥生時代中期以降の遺物包含層である。この直下、灰白色砂礫層から地山を掘りこんだ溝8を検出した。北東から南西方向にやや湾曲する溝で、幅2.5m、深さ0.8mをはかる。断面の形状は逆台形を呈し、溝内には黒褐色粘土と褐色粘土の互層が堆積しているが、当初の溝が埋没した段階で、西肩を生かして再掘削された状況がうかがえる。遺物は溝底から弥生時代中期前葉の土器が、また再掘削後の堆積土から中期中葉の土器片が出土している。

なお、地山直上の暗褐色砂質土層から、イネのプラントオバールが検出されている。

5. 出土遺物

今回の調査では、中央地区から多くの遺物が出土した。うち、とくに多くの遺物が認められ、環濠の形成時期を知るうえで重要となる溝1を中心に記述する。

トレチ1の調査では多数の遺物が出土した。とくに、溝1から出土した弥生時代前期の土器・石器・木製品は集落を取り囲む環濠の形成時期を知るうえで重要である。溝1を中心に出土遺物の概要を紹介するが、溝1の層序は上面を覆う暗褐色粘質土と下層の灰色砂質土などに大別できる。木製品などが出土した暗褐色粘質土を溝1上層として取り扱う。

土器（図12～14） 1・2は溝1の東側肩部からやや内側で、暗褐色粘質土に対応する暗灰色粘土（炭含む）直下の青灰色粘土から出土した壺である。2の口縁部が意識的に打ち欠いているため、溝1の埋没時に水辺で祭祀的な行為が行なわれたものとみられる。1は口縁部が大きく外反し、端部外面に1条の沈線がみられる。頸部と肩部、その中間にも3条ずつの沈線を施す。外面と口縁部の内面には細かなヘラミガキが認められる。2は口縁部が短く外反し、一对の貫孔がある。頸部の削出し突帯に1条の沈線、肩部にも段を削出したあと3条の沈線を施す。外面と口縁部の内面には緻密なヘラミガキが認められる。3は無頸壺で、口縁部に3条の沈線と1箇所の紐孔があり、肩部にも2条の沈線を施している。

壺蓋には、笠形を呈し縁部に1箇所の紐孔があるもの（4）、平形で上面に竹管文を2列十文字に施すもの（5）がある。6は小形の鉢で口縁部は短く、端部を丸くおさめる。壺（7～14）には大小がある。口縁端部に刻目を施す7～10、13・14と無文の11・12に大別である。また、口脣部に2～3条の沈線を施す7～10、12・14と無文の11・13がある。15は口脣部に段がある鉢で、内面には緻密なヘラミガキを施す。溝1から出土

した土器は2が撰津I-2様式、他は撰津I-3様式とみられるが、15の鉢は他と比較して古い様相を示している。

溝1上層から出土した土器は撰津I-4様式を中心とする。壺(17)の口頸部界に1条のみ沈線が確認され、頸胴部には5条の沈線を施している。18の壺胴部には刻目の貼付突帯が3条認められる。壺(19~26)には大小があり、口縁端部に刻目文を刻む19~21、23~25と無文の22・26がある。また、口胴部に1~2条の少条沈線を施す22・25と4~6条の多条沈線を施す20・23がある。16は小形の鉢で、口縁部は短く外反し、端部には刻目を施している。

溝2から出土した土器も撰津I-4様式を中心とする。壺には口頸部に4条の沈線を施すもの(29)、口頸部に4条、頸胴部に沈線3条を施すもの(30)、頸胴部に刻目を施した突帯文を2条貼付けるもの(31)がある。32は口縁端部に刻目、胴部に6条の沈線を施す壺である。33は口縁部を欠損するミニチュアの壺で、外面の一部にハケ調整が認められる。

溝3(トレンチ2)から出土した土器は撰津I-2様式から撰津I-3様式とみられる。壺には口縁部がゆるやかに外反し端部を丸くおさめ、口頸部に3条、頸胴部に4条の沈線を施すもの(34)と口頸部に段、頸胴部に沈線2条まで確認できるもの(35)がある。壺は口縁端部に刻目、胴部に2条の沈線を施し、外面はハケ調整を施す(36)。35の壺が古相を呈している。

27は柱穴から出土した広口壺で、内面に浮文を貼付けている。28は包含層から出土した壺で胴部に3条の沈線がみられ、底部を焼成後、円形に穿孔し、顕形土器の可能性がある。

石器(図15・16) 暗褐色土やその下の灰色礫層から出土したものが大半である。遺構から出土した石器は溝1上層から出土したサヌカイト製の凹基式石鎌(2・5)とピン岩系岩質の扁平片刃石斧(29)がある。

緑色チャート製の凸基有茎式石鎌(1)は茎部の一部を折損している。平基式石鎌(3)、凹基式石鎌(4)、凸基式石鎌(6・8~13)が出土している。7は先端部と基部を欠損しているため形式は不明である。1以外すべてサヌカイト製打製石鎌である。

石鎌には剥片を素材にして一端に鎌部を作りだしたもの(14・16)、大きな頭部をもつものなどが出土した(15・17)。いずれもサヌカイト製である。石小刀(18)は基部を欠損している。石剣は中央部の一部しか残存していないが両側縁に細かい調整剥離痕が認められる(19)。二次加工のある剥片は縁辺を加工している(20)。楔形石器は四角形を呈し、階段状剥離が認められる(21)。スクレイパーは自然面を残した剥片を素材

としており右側縁にかけて刃部をつくりだしている(22)。いずれもサヌカイト製である。

石庵丁には直線刃(23・26)と外湾刃(24・25)がある。23は片刃で全体を研磨し、2箇所の紐孔がある。26の紐孔は1箇所だけである。24の紐孔は1箇所のみ認められ、25も1箇所残存している。23・26の材質は粘板岩で、24・25は緑泥片岩である。石鋸(27)は扁平に薄く割れた紅簾片岩をそのまま利用したもので調整はおこなっていない。柱状片刃石斧(28)は基部と刃部を大きく欠損しているが、残存面には研磨が施されている。材質はきめの細かい砂岩系である。30は砥ぎ面が平滑な砂岩の砥石である。

木製品(図17・18) 溝1上層から木製品が6点出土している。又鋏(1)は6本歯タイプで頭部の一部と左1本目の歯の先端を欠損する。前面に明瞭な加工痕を残し、長さ19.0cm、残存幅35.8cmを測る。2・3は平鋏または狭鋏である。舟形隆起周辺と刃部の一部のみ残存し、3は舟形隆起の上辺中央に小孔が存在する。手斧の柄(4)は一本式で、斧台と握りがひとつの材から成る。斧身を装着する溝は溝底以外大きく欠損している。斧台と握りの境界部分には逆三角形の孔が穿っている。握り基部の先端は環状を呈し、逆三角形の孔を作る。長さ49.5cm、幅25.8cmを測る。5は狭鋏あるいは泥除である。片側に削り出しの突起を作る。内外面とも丁寧な作りで頭部には加工痕を残す。柄を装着したものと思われる逆三角形の孔を中心に入つ。長さ34.0cm、幅7.0cmを測る。6は平鋏未製品とみられる。一本の中央に分割のための切り込みや切痕が認められる。上下端には2箇所の着柄軸を作り出している。両面とも細かい加工痕を残す。長さ25.0cm、幅13.7cmを測る。いずれも樹種はカシ類とみられ木取りは4以外、柵目である。

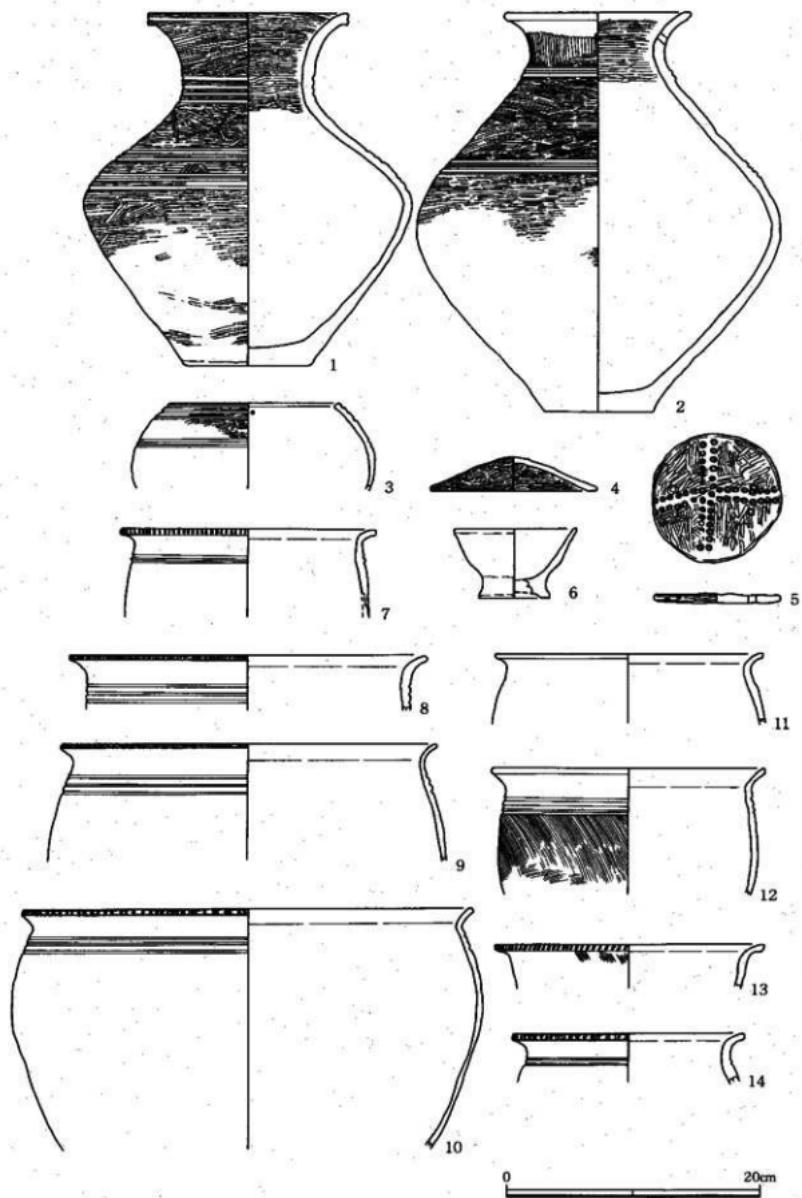


図12 トレンチ1 出土土器（1）

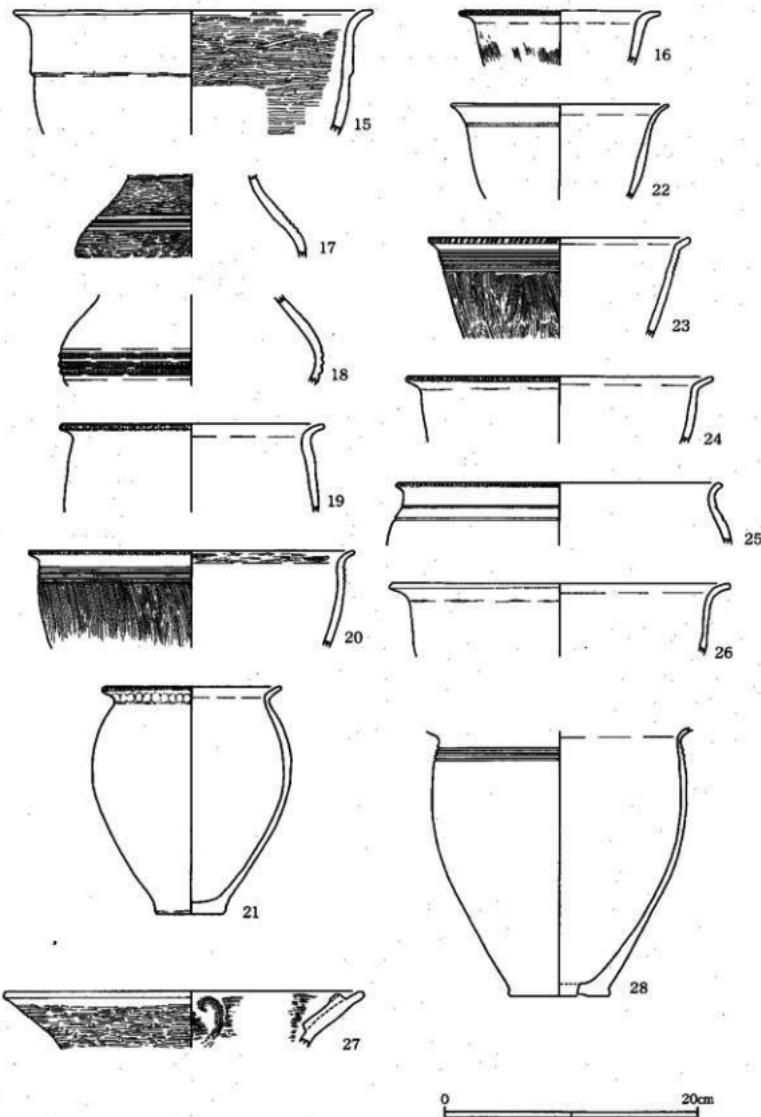


図13 トレンチ1 出土土器(2)

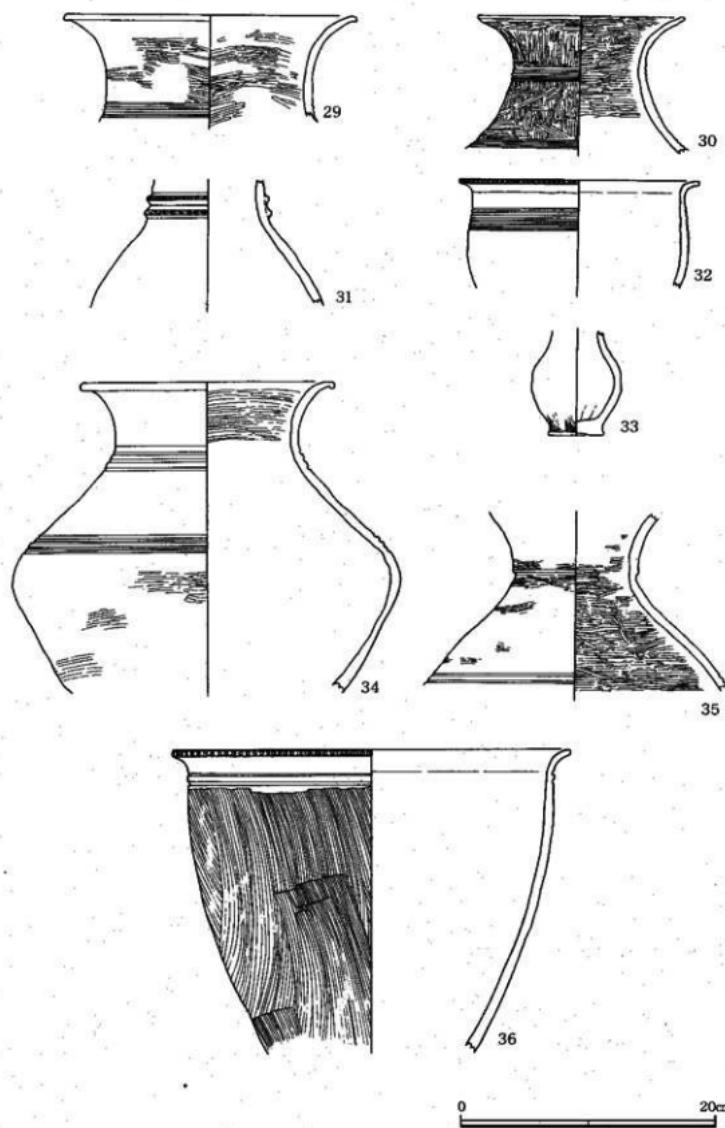


図14 トレンチ1 他出土土器

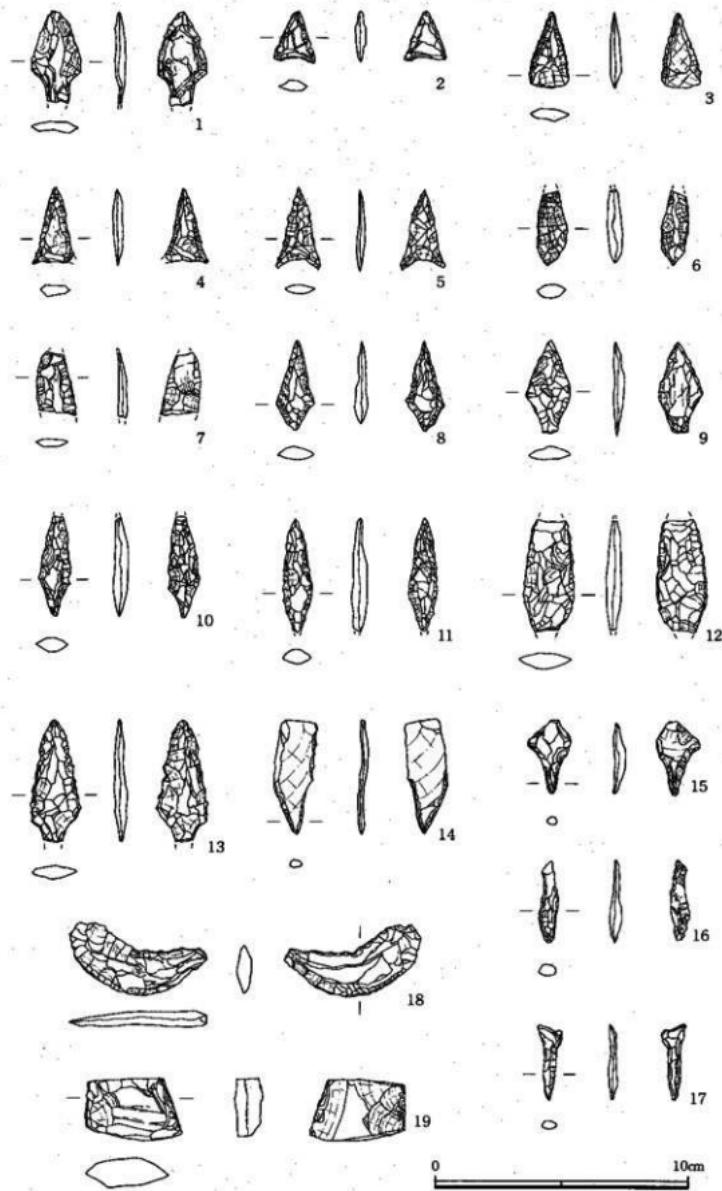


図15 トレンチ1 出土石器(1)

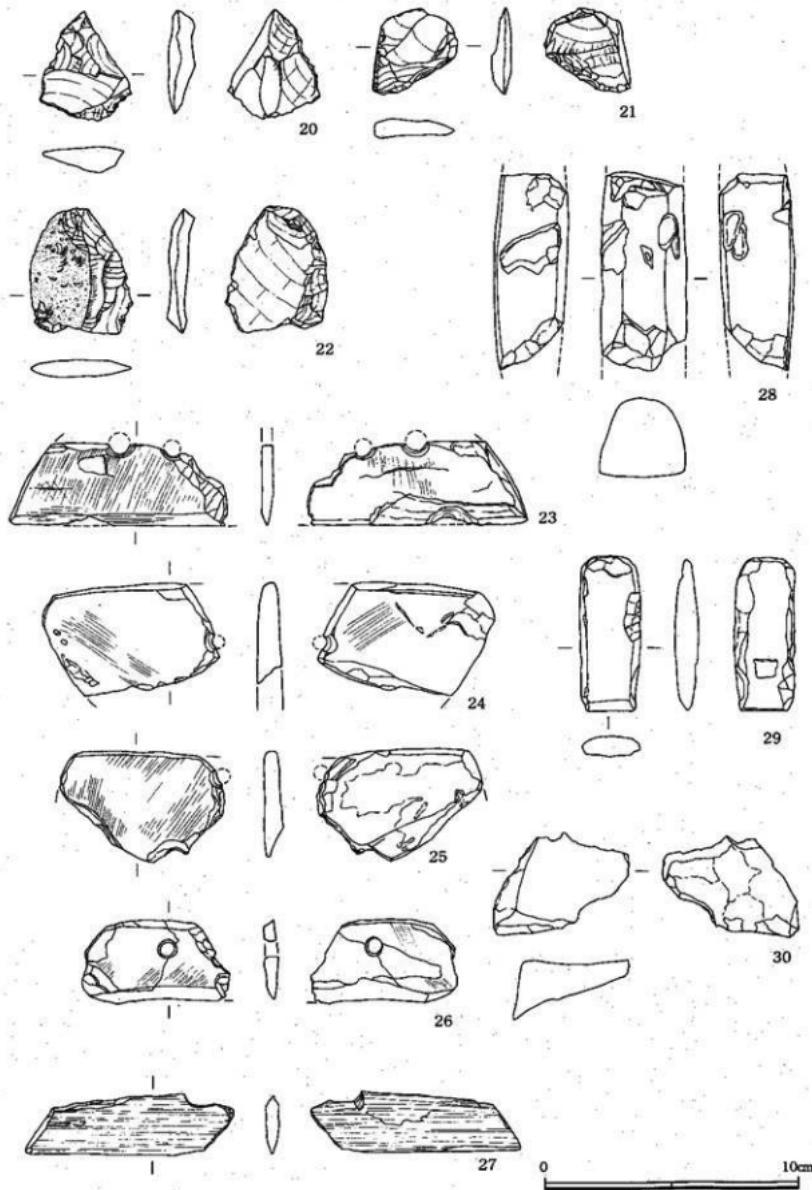


図16 トレンチ1 出土石器 (2)

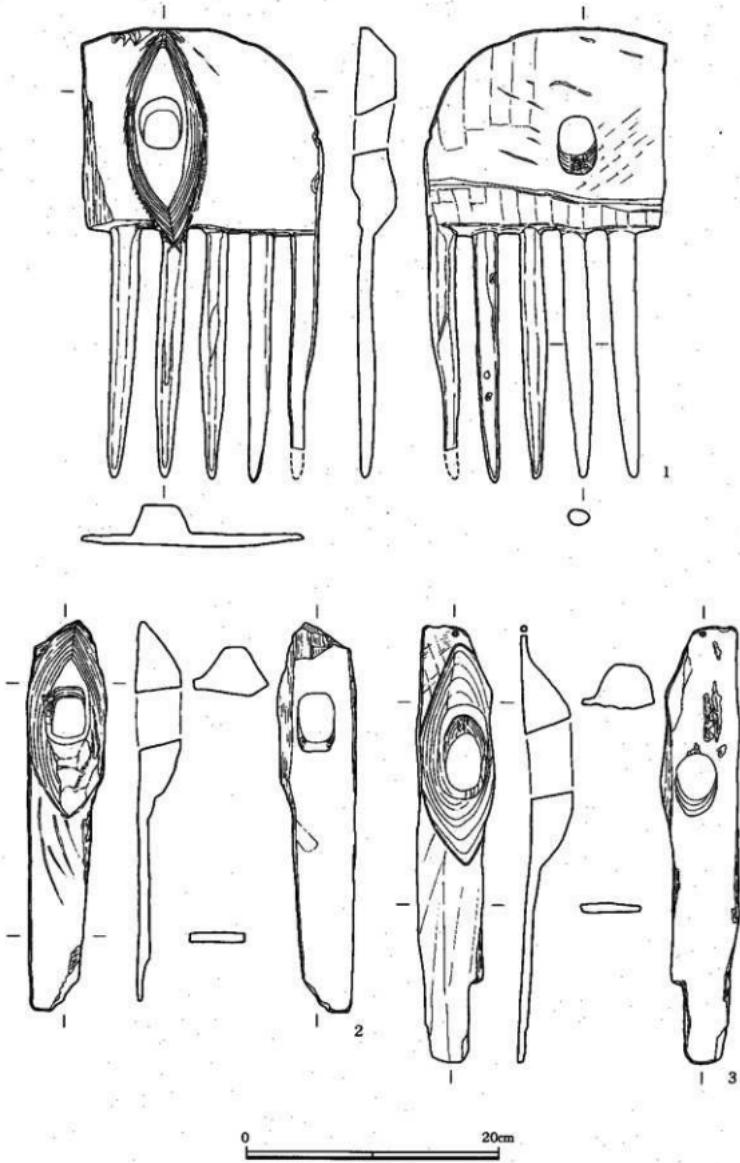


図17 トレンチ1 出土木製品（1）

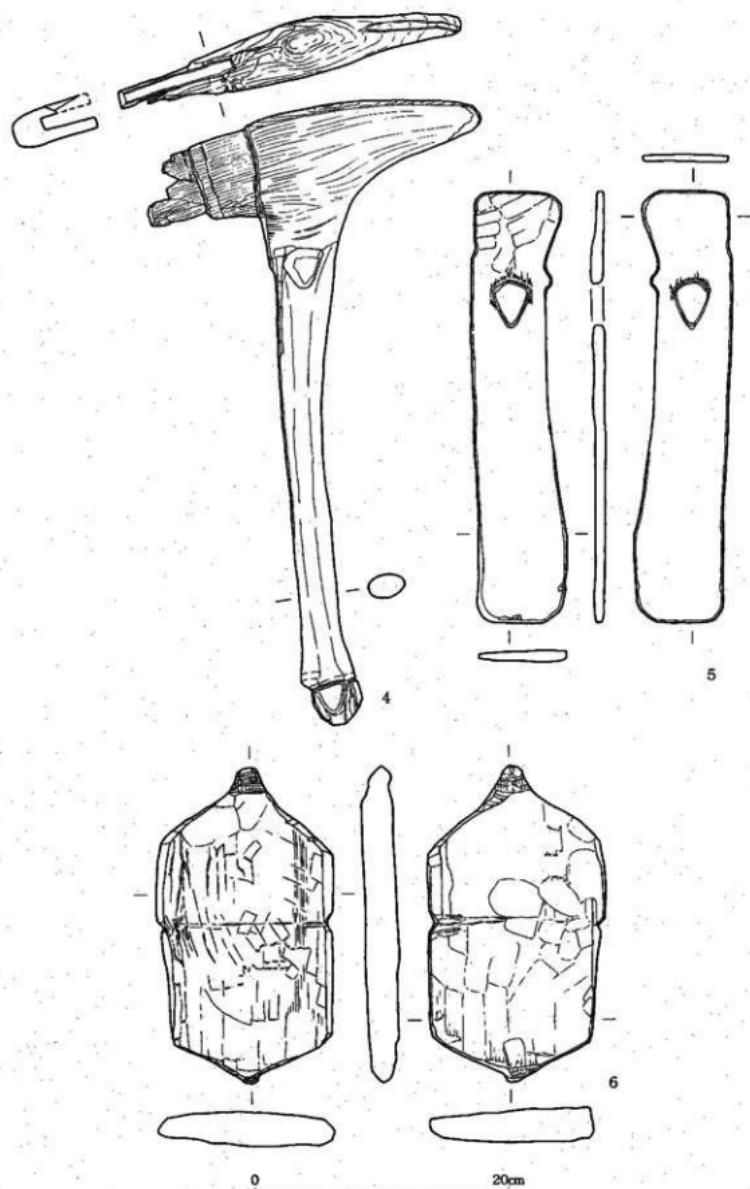


図18 トレンチ2 出土木製品(2)

6.まとめ

2か年度にわたり安満遺跡の範囲確認調査を実施したが、遺構・遺物が極めて良好な状態で遺存していることが再認識された。

トレント1で検出された溝1は、昭和43年に検出された集落を取り囲む二重の環濠のうち内側環濠の延長部とみられる。先行する溝あるいは落ち込み状遺構が埋没した後、東側に掘削されたと考えられ、掘削時期は下層出土土器からI-3様式期までとみられる。西側肩部を形成する細かい黒色粘土塊を含む暗灰色粘土は、掘削時の排土を溝あるいは落ち込み状遺構の上に盛ったもので、これに対応するものは溝1北側肩部では確認されない。溝1の埋没時期は、上層の暗褐色粘質土から出土する突帯を貼り付けた壺や多条沈線の壺からみて、弥生時代前中期の摂津I-4様式期である。

安満遺跡の集落や環濠の形成時期を考えるうえで貴重な資料として、溝1から出土した鉢(15)がある。胴部から口縁部に向けて段を削り出すもので、神戸市大開遺跡、東大阪市立磨・若江北遺跡、寝屋川市讀良郡条里遺跡で出土例がある。安満遺跡では初出で、摂津I様式の古い時期に位置づけられるものとみられる。

安満遺跡の環濠は、20年度の調査により、二重の環濠が同時にめぐるのではなく、内環濠(溝1)埋没後に外環濠(溝3)が掘削されたことが判明している。今回、南側のトレント3-2では、前期の環濠とみられる溝4・5・6を検出した。粘質土と砂礫による埋没状況は溝1と溝4・5、溝3と溝6が似た状況を示すなど、内から外へ居住区の拡大等に対応して、幾度か再掘削されて存続したようである。ただ、その時期も中期前半までと考えられる。

西地区では、南東隅一農場事務所南方一の溝9以外には顯著な遺構は検出しなかった。レーダー探査やボーリング調査では、一帯が湿地帯となっていることが判明していたため、水田の検出と範囲の把握を念頭に調査地を設定したのであるが、いずれの地点でも水田經營には適さない湿地帯であることが明らかとなった。プラントオバールでもイネは検出できておらず、居住域の西側は水田に適した地質ではなかったのであろう。

唯一検出した溝9は、東流して井堰が設えられた自然流路へと流下するとみられる。溝底は人為的に高さを調整しているが、耕作関連というよりも、湿地帯からの排水機能などを考慮すべきであろう。

東地区では、方形周溝墓を検出した。安満遺跡の墓域は集落の東西に広がり、うち東部方形周溝墓群は農場東側隣接地で検出している。

今回検出した方形周溝墓は、探査の状況からもさらに周辺に及んでいるとみられ、集落東側の微高地が墓域に設定されていたこととともに、墓域の西限をはばつかむことが

できた。墓域に前期の遺構は見出していないが、過去の調査においては、周溝墓が西から東へ向かって形成されていること、西端部分で前期の方形周溝墓の存在が予測されていることをふまえれば、周辺に前期の墓域が存在する可能性は否定できない。

いっぽう、集落域と墓域にはさまれた場所は、現地形が南北方向にのびる谷地形となり、レーダー探査やボーリングでも西地区と同様に低湿地の地質であることが判明している。この南端では、弥生前期の井堰を検出していることから、水田域の有力候補地とされてきた。

発掘調査では、畦畔や水田土壤などの具体的な水田遺構は検出できず、西地区のような湿地が広がる状況が明らかになってきたが、居住域との接点となる、A-3トレンチとその南西側のボーリングサンプルからは、前期に相当する土壤からイネのプラントオバールを検出している。ここは、井堰のすぐ上流部にあたることから、水田が存在していた可能性が高い。

つまり前期の水田域は、完全な低湿地ではなく、扇状地末端にある微高地の縁辺に設定され、想定よりも限られた範囲で耕作していたことが考えられる。

以上のように、京大農場内の確認調査では、弥生時代を中心に多くの遺構・遺物を検出することができた。とくに、弥生前期に限れば居住域・生産域・墓域という集落の構成要素をほぼ想定することが可能となったことは大きな成果である。

V. 出土遺物保存処理

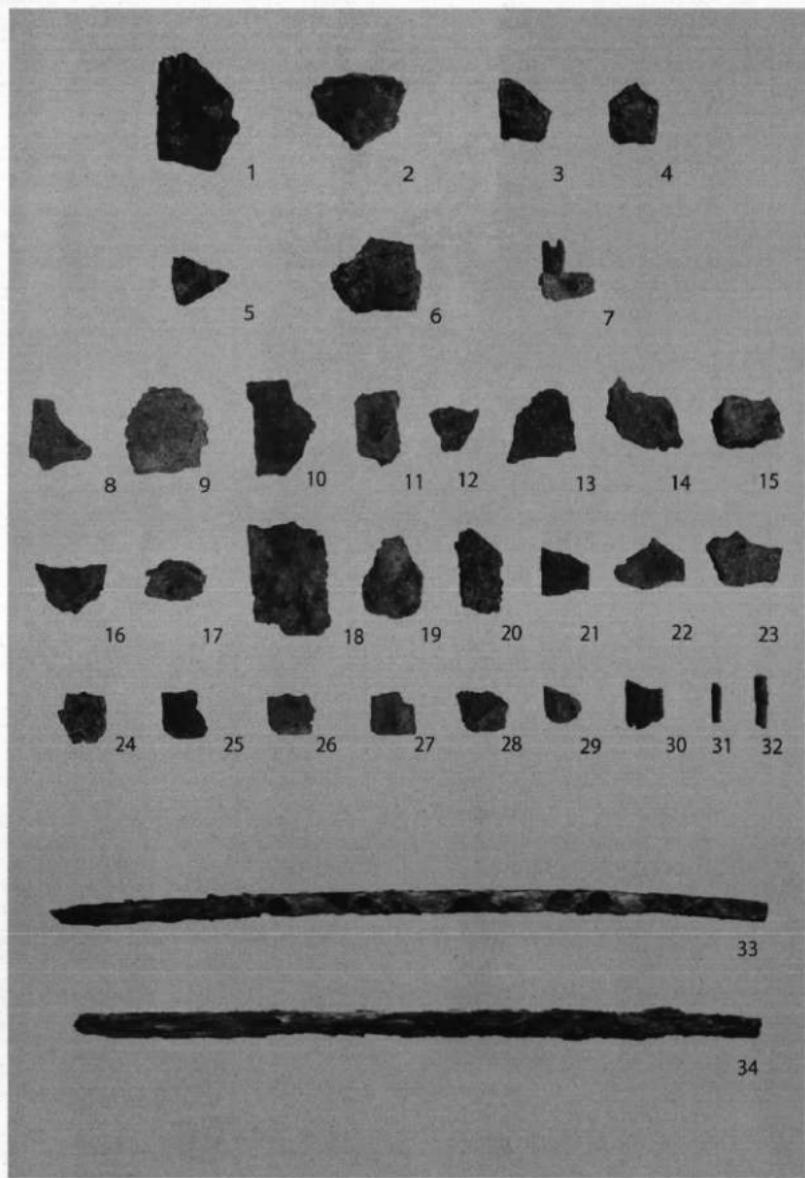
平成21年度は、今城塚古墳及び弁天山古墳群で出土した金属製品の保存処理を委託事業として実施した。

今城塚古墳の金属製造物は、規模確認調査において出土したものであり、弁天山古墳群の金属製造物は、1963年の弁天山古墳群の調査で出土した金属製造物である（表1）。

これらの遺物はいずれも腐食が進行しており、迅速な対応が求められることから、樹脂含浸による保存処理をおこなった。

古墳名	番号	種別	法量 (cm)		古墳名	番号	種別	法量 (cm)	
			長辺	短辺				長辺	短辺
今 城 塚 古 墳	1	馬具	3.0	2.0	今 城 塚 古 墳	19	小札	3.8	1.7
	2	馬具	2.8	2.5		20	小札	3.9	1.8
	3	馬具	1.9	1.5		21	小札	2.3	2.1
	4	馬具	2.0	1.5		22	小札	2.5	3.3
	5	馬具	1.7	1.5		23	小札	3.6	2.5
	6	馬具	2.8	2.2		24	小札	2.7	2.3
	7	飾金具	1.9	1.8		25	小札	2.8	2.1
	8	馬甲片	2.8	3.5		26	小札	2.5	2.3
	9	馬甲片	3.9	3.6		27	小札	2.0	2.0
	10	馬甲片	4.3	2.9		28	小札	2.0	1.9
	11	馬甲片	3.4	2.1		29	小札	1.7	1.7
	12	馬甲片	2.2	2.0		30	小札	2.2	1.7
	13	馬甲片	3.3	3.3		31	鉄鎌	1.9	0.5
	14	馬甲片	4.2	0.8		32	鉄鎌	2.6	0.6
	15	馬甲片	2.9	2.6	弁 天 山 古 墳 群	33	鉄刀	85.7	2.8
	16	馬甲片	3.2	3.2		34	鉄刀	72.2	3.0
	17	馬甲片	2.7	1.9					
	18	小札	5.2	2.0					

表1 今城塚古墳・弁天山古墳群出土金属製品一覧



抄 錄

フリガナ	シマガミイセキダン
書名	島上遺跡群
副書名	
巻次	34
シリーズ名	高槻市文化財調査概要
シリーズ番号	37
編集者名	宮崎康雄 橋本久和 高橋公一 早川圭 内田真雄 今西康宏
編集機関	高槻市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター
所在地	大阪府高槻市南平台五丁目21-1
発行年月日	2010年3月

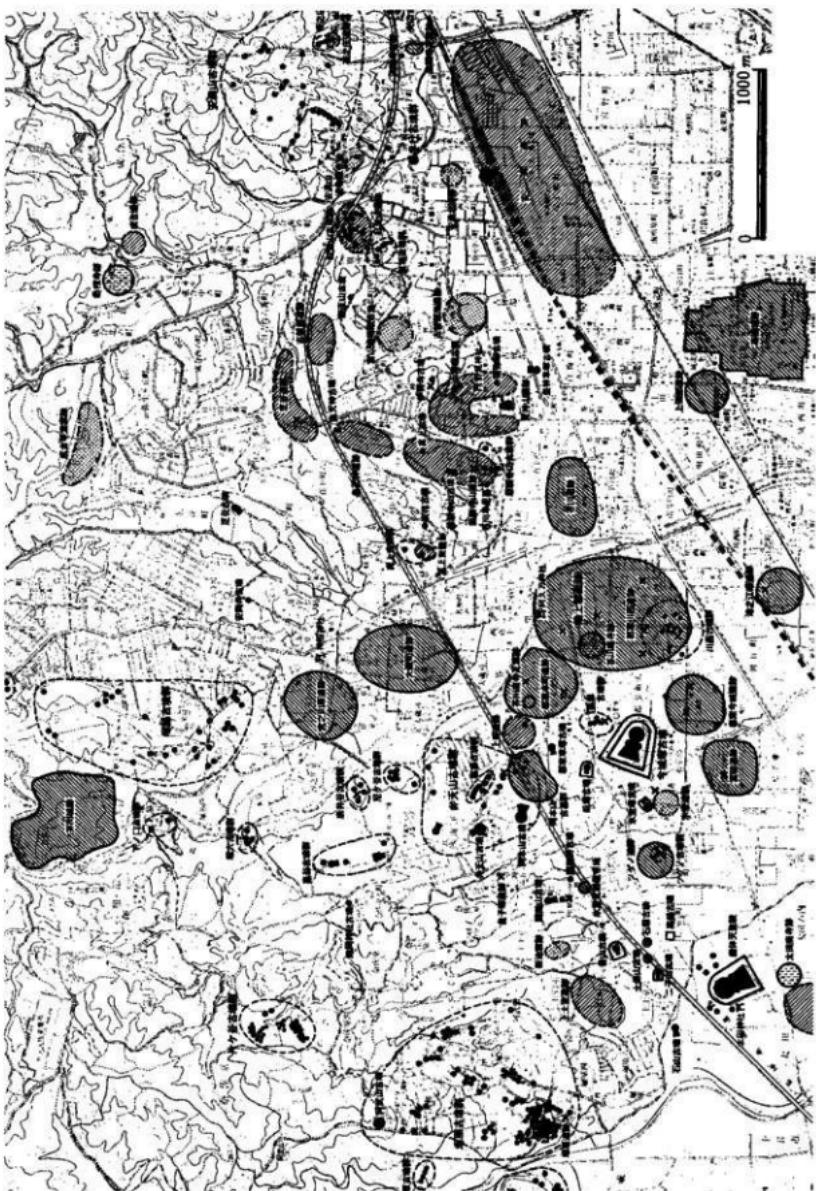
フリガナ	シマガミイセキダン					
所収遺跡名	島上遺跡 73-C地区					
フリガナ	シマガミイセキダン					
所在地	大阪府高槻市郡家新町170-5					
コード	北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因					
市町村	遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
27207	39	34° 50' 54"	135° 35' 57"	20090601	立会	個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島上遺跡	官衙	奈良・平安				

フリガナ	チヨガミヨウイセキ					
所収遺跡名	中城遺跡					
フリガナ	チヨガミヨウイセキ					
所在地	大阪府高槻市昭和町2丁目19-16					
コード	北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因					
市町村	遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
27207	47	34° 49' 42"	135° 35' 15"	20090528	立会	個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
中城遺跡	集落	中世				

フリガナ	テンジンノマライセキ					
所収遺跡名	天神山遺跡					
フリガナ	テンジンノマライセキ					
所在地	大阪府高槻市天神町2丁目10-24					
コード	北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因					
市町村	遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
27207	72	34° 51' 32"	135° 37' 00"	20090421	立会	個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
天神山遺跡	集落	弥生				

フリガナ	アマヒセキ				
所収遺跡名	安満遺跡(範囲確認調査)				
フリガナ	アマヒセキ				
所在地	大阪府高槻市八丁畷町260-266				
コード	北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因				
市町村	遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
27207	83	34° 51' 34"	135° 37' 42"	20090420 20090331	150 m ² 範囲確認
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安満遺跡	集落	弥生	溝・柱穴	土器・石器	

図 版



鳴上郡衙跡とその周辺



a. トレンチ1 遺物出土状況（南西側から）



b. トレンチ1 遺物取り上げ後（南西側から）



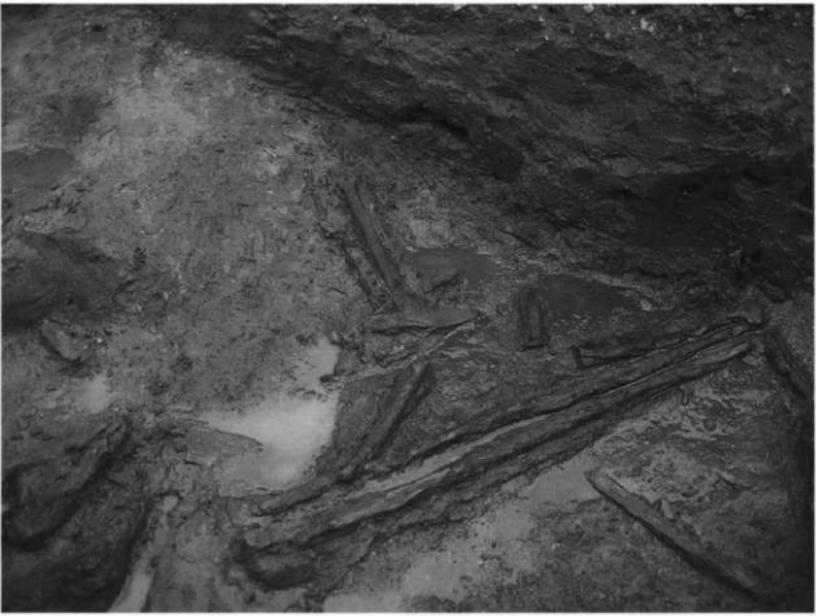
a. 溝1遺物出土状況（北側から）



b. 溝1遺物取り上げ後（北側から）



a. 溝1木製品出土状況（西側から）



b. 溝1木製品出土状況（西側から）



a. トレンチ3-1 下層（南西側から）



b. トレンチ3-1 下層検出の柱痕（東側から）



a. トレンチ3-2 溝4・溝5（南側から）



b. トレンチ3-2 溝5断面（北西側から）



a. トレンチ3-2 溝5遺物出土状況（南側から）



b. トレンチ4 土層断面（南側から）

高槻市文化財調査概要 37

鳴上遺跡群 34

平成 22 年 3 月 31 日

発 行 高 槻 市 教 育 委 員 会

文化財課 埋蔵文化財調査センター

高 槻 市 南 平 台 五 丁 目 21 番 1 号

印 刷 株 式 会 社 邦 文 社

大 阪 市 東 淀 川 区 大 桶 1 丁 目 5 番 2 号



再生紙を使用しています